
アリス

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリス

【Nコード】

N2302M

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

不思議の国へおいで、アリス。

十年前に突然失踪した兄から手紙を受け取ったアリス。
幼い頃の約束が思いがけない現実を連れて果たされる。

アリス（１）

シロウサギを追いかけて、不思議の国へ駆けておいで。
昔、話して聞かせた話を覚えてるかい？

僕は約束を守ったよ。今度は君の番だ。

早くおいで、アリス。

お茶会の時間はもうすぐだ。

シロウサギは待つてはくれない。

遅れないように、見失わないように。その背を追って、急いでお
いで。

…不思議の国へおいで、アリス。

+ + +

学校から帰って習慣のように覗いた郵便受けに、自分宛の手紙が
一通入っていた。

「アリス？ どうしたの、変な顔をして」

郵便受けの前で立ち尽くす彼女を怪訝けげんに思ったのか、ルームメイ
トのジュリアが背後から声をかけてきて、アリスはようやく我に返
った。

「え、うん…ほら、手紙」

「手紙？」

「うん、わたし宛なの」

何となく手に取るのが躊躇ためらわれて、郵便受けの中を指で示すと、
ジュリアもおや、という顔になる。

「本当だ。…取らないの？」

「え。だって…わたしに手紙が来るなんて、何だか不思議で」

何処か不安そうなアリスの言葉に、ジュリアは呆れた視線を向けてくる。

たかが手紙一通。アリス自身もそう思うのだが、でもどうしても手が出ないのだ。

何しろ、アリスが個人的な手紙を最後に受け取ったのは十年前。それから一度もアリス宛の手紙が届いた事はない。

だからアリスはアリスでも、別のアリスに届いた手紙かもしれないと思うし、『アリス』という名前は、特に珍しい部類の名前ではない。

実際、ジュリアと通う学校にはアリスという名前を持つ少女が両手の数は存在している。

「何言ってるのよ。個人的な手紙だとは限らないじゃない」

しかし、現実的なジュリアはアリスの微かな期待と不安をそんな言葉で一蹴した。そしてさつと件くだんの手紙を郵便受けから取り出すと、ほら、とアリスの手に押し付ける。

「ダイレクトメールにしちゃシンプルだけど、その可能性もあるでしょ？ そんなに気負わなくても、手紙が噛み付く訳じゃないんだから」

「…う、うん。そうだね」

押し付けられた手紙をそっと持ち上げる。

住所は間違っていないし、確かにアリスへの手紙だ。それを確かめてから手紙を裏返すと、差出人らしき人物のサインがあった。

「…え？」

そこに記された綴つづりを確認した瞬間、アリスの顔ははつきりとわかる程に血の気が引いた。

「どうしたの、アリス？」

先に部屋へと行きかけたジュリアも、アリスの異変に気付いてまた戻ってきた。

背後から覗きこむように差出人の名前を見つめ

そしてジュ

リアの顔もまた固く強張る。

「…そんな……」

呻くように呟くジュリアの言葉には、明らかに信じがたいという感情が込められていた。

「ね、もしかしてこの名前って…アリスの」

「……」

アリスは青ざめたまま食い入るように差出人のサインを見つめる。その名を、アリスはよく知っていた。この十年というものの忘れた事は一度もない。

震える指でそつとその文字を辿り、やがて吐息と共に小さく呟いた。

「…兄さん……」

+ + +

アリスに両親の記憶はない。

物心つく頃にはすでに亡くなってしまっていた彼等の事は、時として思慕を募らせる事はあっても、現実感を持った存在ではなかった。

写真すらもなく、どんな人物だったのかさえ人伝えに聞くばかりで、アリスにとっては寝物語に聞く御伽噺の住民と大して変わらなかった。

『淋しいかい、アリス？』

時折、近所のおじさんやおばさんにそう尋ねられる事もあったが、アリスはいつも決まって笑顔で否定したものだ。

『うつん！ だって、お兄ちゃんがいるもの！』

アリスには十歳年の離れた兄がいて、それがアリスの家族の全てだった。

優しい兄、賢い兄。自慢の、大好きな『お兄ちゃま』。

当時学生だった兄は、当然の事ながら丸一日側にいてくれる事はなかったけれど、その分家にいる間はアリスとの時間を第一に考え続けていた。

眠りに就くまで物語を話してくれるのも兄だった。

不思議な物語、ほんの少し怖い物語。

勇敢な騎士や美しいお姫様が出てくる物語。

その中でもアリスの一番のお気に入り『不思議の国のアリス』という話だった。

自分と同じ名前の少女が迷い込む、不思議な国の物語。

うさを追いかけて、小さくなったり大きくなったり、へんてこな生き物や人物と出会ったり。

あまり身体が丈夫でなかったアリスは、その頃自分の家からほとんど出る事のない生活を送っていた。

だから…憧れたのだ。まるで自分の代わりに『アリス』が冒険をしてくれているような気がして。

「お兄ちゃま。不思議の国って本当にあるの？」

わくわくしながら尋ねると、兄は優しく笑って頷いてくれる。

「あるよ。アリスが信じるのなら、きっとね」

「本当？　じゃあ、信じる！」

妹の無邪気な言葉を兄はやっぱり笑って聞いていた。

当時はまだ十二、三歳程の少年ながらも、兄はアリスにとっては最も身近な『大人』だった。

彼の言葉はいつだって正しかったし、およそ欠点らしい所がなかった兄。そんな彼が言うのなら、本当に『不思議の国』はこの世界の何処かあるに違いない。

「いつか行きたいな……」

「行けるよ。いつの日か必ず」

完全に彼の言葉を信じきってそんな事を言う妹の布団の乱れを直しながら、兄は笑顔で答えてくれる。

その口ぶりはまるで『不思議の国』の場所を知っているかのように、アリスは実際に兄は知っているのだろつと確信した。

兄は嘘をついた事がない。だからきつといつか、自分に行けるに違いない。

『アリス』が冒険した『不思議の国』へ。

「その時はお兄ちゃまも一緒？」

「おや、一人じゃ行けないのかい？」

単に兄が一緒だったら嬉しいのに、という軽い気持ちで言った言葉に対して、返って来たのはそんなからかい混じりの言葉。アリスはむう、とむくれる。

時折、兄は少し意地悪な事を言う。概して子供扱いされて喜ぶ子供などいるはずもなく、アリスも反射的にその言葉を否定していた。「そんな事ないもん。一人でも大丈夫だもん！」

そんなアリスをくすくすと笑いながら、兄はじゃあ、と片手を差し出した。

小指だけ立てたその手が意味する事はアリスもよく知っている。けれど、何故今この時に兄がそんな事をするのか理解出来ずに、自分よりも二回りは大きな手を見つめた。

「…お兄ちゃま？」

「約束しよう、アリス」

笑顔のまま、兄は言った。

「もし、僕が『不思議の国』を見つけたら、アリスにその場所を教えてあげるよ」

「本当？」

「うん。他の誰にも教えないで、アリスにだけ教える。だからね、アリス…アリスも僕と約束してくれるかい」

「なあに？」

不思議に思いながらも兄の言葉が嬉しくて、その小指に自分の小さな指を絡める。兄と約束事を交わすのは随分久し振りのような気がした。

…思えばこの時に交わした約束が、最後に兄と交わした約束だった。

「…これから先、何が起ころうとも僕の事を信じる。出来るかい？」

その瞬間、それまで笑顔だった兄の顔が急に真剣なものに変わる。それは兄が初めて見せた顔で、アリスは正直戸惑った。

兄を信じる事は今まで当たり前だったし、疑う事など考えもしない事だったからだ。けれどあまりに兄が真剣だったから、結局アリスは頷き、絡めた小指に力を込めた。

「うん…、わかった。約束する」

「約束だよ」

そして、指きり。

何処かほっとしたような兄の笑顔に、疑問を感じなかったと言えは嘘になる。

けれどその後、何事もなく日々が過ぎる間に、その時感じた疑問は薄れて時に紛れて消えていった。

穏やかな、兄と二人の生活はそうしていつまでも続くかに思われた。

アリスが七歳の春。

兄が突然、アリスに何も告げぬまま失踪してしまうまでは。

アリス(2)

木製のペーパーナイフを握り、そつと隙間から刃を滑らせ開封する。

差出人　　つまり、アリスの失踪した兄　　の名以外は何も書いていないそれを、ジュリアの『性質の悪い悪戯かもしれない。そのまま処分した方がいいんじゃない？』という忠告を聞き流してまで手放さなかったのは、何か予感のようなものを感じたからかもしれない。

とても、状況が良く似ていたのだ。兄がいなくなってしまった時と。

あの時も郵便受けに手紙が入っていた。

兄から自分に宛てて手紙を貰うなど初めての事で、アリスはそれを見つけた最初こそ面白がって喜んだ。

何しろ同じ屋根の下で暮らしているのだ、手紙になんてわざわざ書かなくても、用事があれば直接言えばいい。

それをわざわざしないで手紙などという回りくどい手段で伝えるなんて、きつと兄が考えた新しい遊びなのだと思ったのだ。

…しかし。

中を見たアリスは、首を傾げる事になった。

というのも、見覚えのある兄の文字で書かれていた事は随分と意味不明だったのだ。

そこにはこう、書かれていた。

『親愛なる妹、アリス。

クロウサギがやって来て、お前に鍵を渡す。

なくさないように大事に持っておいで。

時の砂が全て落ちるまで、お茶会はまだ始まらない。

クロウサギが女王の国へ連れて行ってくれる。

約束の時が来るまで、そこにいるんだ。
鍵といつか交わした僕との約束だけは忘れずに』

まったく意味がわからずに降参したアリスは、兄が帰宅した時に一体どういう意味だったのか尋ねようと、兄の帰りを首を長くして待った。

いつもなら学校が終わるとすぐに帰ってくる。時計を見るともうそろそろ帰ってきて良い時分だ。

ところが、その日どんなに待っても兄は帰らなかった。

不安に怯えて眠れぬ夜を過ごした翌日。

玄関先で鳴ったベルに飛びつくようにして扉を開けると、そこには『後見人』を名乗る見知らぬ男がいて、アリスにこう言ったのだ。
『た。』

『アリス、君の兄はいなくなってしまった。この家は幼い君が一人で住むには余りにも広い。丁度君は九月から学校へ通う事になっていたね？ いい学校がある。全寮制でね、衣食住はそこに在る限り困る事はない。特別に話をつけて、学校が始まる前からそこで暮らせるように手配しよう』

黒い髪に黒い瞳、黒ずくめのその男は笑顔こそ優しかったが、何処か強引だった。

幼いアリスには男の言葉の半分も意味がわからなかった。ただわかったのは 兄がいなくなった、という最初の言葉。

何処に行ったの、と尋ねるアリスに、男は困ったように肩を竦めるばかりで答えてはくれなかった。

そのまま有無を言わず、アリスを乗ってきた車に乘せてしまうと、自分自身は乗らずに運転手に行く先らしきものを告げ、事態の展開について行けないアリスには謎の言葉を別れの挨拶のように口にした。

『満月。クローバーの庭。銀のうさぎ』

呪文のような単語だけのその言葉に首を傾げ、何の事かと尋ねかけた時にはもう車は動き出していて。

結局そのまま、アリスは今いる学園にほとんど身一つで連れて来られてしまったのだった。

手に持っていたのは、最後に兄が自分に宛てた手紙だけ。

数日後、アリスの身の回りの物が全て届けられ、なし崩しにアリスの学園での生活が始まっていた。

…あれから、十年。

兄の消息はようとして知れず、『後見人』はその後姿を見せる事無く、アリスは十七歳になっていた。

(…生きていたの？ どうして今頃になってこんな手紙を出したの、兄さん……)

まだ完全には信じ切れない。

何しろ、十年という月日はあまりにも長過ぎた。

あの『後見人』の言葉は、もしかしたら兄が死んだ事をあえてぼかして表現した言葉だったのではないかと、思うようにすらなっていたのだ。

…そんな状況に、この手紙だ。アリスの心が乱れるのも当然だと考えた。

切り開いた場所から中を覗くと、封筒の中には無地の便箋らしきものが一枚だけ折り畳まれて入っていた。

取り出そうとして、ふと思いついて窓辺に置かれている自分の机に歩み寄る。

引き出しの一番上。そつと開くとそこには小物と一緒に古びた手紙が入っている。 あの時の手紙だ。

それを手にとって、今日届いた手紙の差出人のサインとそこに記されたサインを見比べる。

十年の間に文字の丁寧さが幾分変わっていたけれど、ほんの少し右上がり気味に書かれている所はそっくりで、同じ人が書いたものだと証明しているかのようにだった。

(……)

意を決して、ついに便箋を引つ張り出して広げると、そこには最初の手紙を彷彿とさせる言葉が並んでいた。

『親愛なるアリス。

まだ僕の事を覚えているだろうか。

お茶会の準備が整った。

クロウサギに渡された鍵は、ちゃんと持っているかい？

それだけあれば、何も他にはいらない。

シロウサギが君を迎えに来る。

彼について扉を開けてごらん、アリス。

約束した「不思議の国」が、その先で君を待っているよ。

道に迷いそうになっても大丈夫。

君が僕との約束を覚えている限り、何も心配はいらない。

親愛なるアリス。

「不思議の国」に来れるかどうかは、君の勇気次第だ。

優しい誘惑に君が負けない事を祈る』

「……どういう事……？」

思わずアリスは呟き、もう一つの手紙と見比べた。
同じだ。

少なくともこの手紙を書いた人物は同一人物に違いない。そうでなかったら、ここまで符牒ふちようが合うはずがない。

という事は。

(やっぱり、兄さんは何処かに生きている？)

しかし、その反面思ってしまう。だったら何故、今なのだ、と。

生きていたのなら、どうしてこの十年の間に一度も連絡をくれなかったのだろう。

この世に一人きりかもしれない、と淋しさに眠れない日や休暇で帰省してゆく友達の後姿に感じた羨ましさを思い出す。

今まで放っておいて、何故こんなふざけた手紙を寄越せるのか、と。

…彼が自分の居場所を知っている事に関しては疑問には思わなかった。

きつとあれ以来一度も姿を見せない『後見人』から伝わっているだろうし、ひよつとしたら『後見人』にここへやるように兄から頼んだ可能性すらある。

というのも、彼が残した最初の手紙には、現在アリスがいる場所を示唆する言葉がちりばめられているからだった。

クロウサギが女王の国へ連れて行ってくれる 黒尽くめの『後見人』によってつれてこられたこの地の名前はクイーンズワールド、すなわち『女王の国』。

やって来たあの紳士を『クロウサギ』とするならば、自分はこの場所で兄が言う『お茶会の準備が整う』までここで待っていないければならないだろう。

そして、今回の手紙 。

（準備が整ったって、どういう事なの？ 何故十年もかかったの？

…何故、何も言わないで突然いなくなったの？）

…兄と交わしたという約束の事はまだ覚えている。

物心つくかつかないかの頃だったのに、今もまだはつきりと。

兄は『不思議の国』が見つかったら一番にアリスに教える事を。

アリスは何があっても兄の事を信じる事を、それぞれ指きりして約束した。

でも 年端も行かない子供の頃ならともかく、十七歳の今、そんな他愛ない約束を頭から信じる事が出来ないのもまた事実だ。

…もう、『不思議の国』が現実には何処にもない事を知っている

から。

ジュリア辺りがこの手紙を見たら、きっと一笑に付してしまうだろう。『手のこんだ悪戯ね』、くらい言うかもしれない。

しばらく二つの手紙を交互に眺め、結局アリスはその二つをそつと机の引き出しにしまった。

謎かけのような手紙の、その示す意図もよくわからない。からかわれている気もするし…捨てて、忘れてしまうべきなのかもしれないけれど。

反面、この暗号のような手紙の真意を汲み取れば、何か大事な事がわかるような気もするのも誤魔化しようの無い事実だから。

アリス(3)

その夜、アリスは夢を見た。
不思議な夢だ。

がらんと広い部屋。中央にベッドがある他は家具らしきものはない。そのベッドに自分が眠っている。

上空からその寝顔を見下ろして、アリスは困惑した。

夢の中で眠っている自分を見るなんてどういう事だろう、と。

目が覚めたら夢判断の本でも覗いてみるべきかしら？　そ

んな事を考えていると、部屋の奥にあった扉が前触れもなく開いて、そこから二人の人間が姿を現した。

あ、とアリスは目を見開く。

二人の内、一人はアリスの知った顔だったからだ。

黒い髪に黒い目。そして黒尽くめの服装　『後見人』と名乗ってアリスの前に現れたあの紳士だ。

もう一人は女性のようだった。

髪が短い上にすらりとした体型で、女性らしい華やかな雰囲気がないけれど。

「…いつ、迎えに行く？」

少し心配そうに『後見人』が口を開いた。

「明日の夜だそうです」

答えた声はやっぱり少し低めの声で、中性的な雰囲気を強めるものだった。

「さて、うまく行くといいが……」

「うまく行きますよ」

「だが、あいつはここ数日動きっぱなしだぞ？」

「…いつもの事でしょう。『忙しい』『時間がない』が口癖になってしまっ程多忙なのは、彼の自業自得です」

「だが……」

やはり心配そうな『後見人』に対して、もう一人の人物は淡々と相槌を打つ。毒はないが取り付く島のない言葉に、『後見人』も言葉が濁した。

「…ここまで来たら信じるしかありませんよ」

軽く肩を竦めて、彼女(?)は言った。

「彼を。そして…彼女　　アリスを」

+ + +

「…？」

「あれ、目が覚めたの、アリス」

突然目を見開いたアリスに、今、正に彼女を起こそうとしていたジュリアが驚いたように目を丸くした。

いつもなら、アリスは寝起きがあまり良くない。ルームメイトのジュリアから起こされるまで目を開かない事も多いのだ。

だがジュリアの困惑など気付かず、アリスはむくりと身を起こし、周囲をぐるりと見回した。

「…アリス……？」

理解不能なアリスの行動に、ジュリアが困惑気味の声をかけると、ようやくアリスは肩から力を抜いた。

「夢、か……」

「どうしたのよ、アリス。夢見でも悪かったの？」

「うーん…悪い夢という訳じゃないんだけど……」

どちらかというと、意味不明の夢だった。

しかも妙に現実感があって、目を開いた時、一瞬あの夢に出てきた広い部屋で目覚めたような気さえした。

（…あの手紙のせい？）

『後見人』と…見知らぬ女性が出てきた。

眠っているアリスの横で、理解不明な会話をして　　。

(……)

何故か最後の言葉が耳に強く残っている。

『彼を。そして…彼女　　アリスを』

(…彼って誰だろう？　それに…どうしてわたし？)

『信じる』、という言葉が出たせいだろうか。何故かそれは兄と交わした『約束』を強く思い出させた。

幼かった自分に兄が約束させた事。

何があっても　　彼を信じるという事を。

「アリス？　ちょっと…大丈夫？」

「え？」

「やっぱり昨日の手紙、良くない事でも書いてあったんじゃないの？　今、すごく思いつめたような顔してたよ？」

心配を隠さず、少し怒ったような口調のジュリアにアリスは思わず微笑む。何処か張り詰めていた心が解れるのを感じながら。

「な、何」

思いがけなかったアリスの微笑にジュリアがうるたえた顔をする。そこに更に微笑みかけて、アリスは感謝と共に言葉を送った。

「ううん…ジュリアがいてくれて良かった、って思ってた」

ジュリアはこのクイーンズフィールドに来て出来た最初の友達で、唯一無二の親友だ。少なくとも、アリスにとっては。

彼女がいてくれて、縁のない心細さからどんなに救われた事だろう。

そんな風にいつも思っていたけれど、照れ臭くて今まで口にした事はなかった。だからだろう、ジュリアの反応とえば、これ以上ない混乱したものだっただ。

「…！　何、恥ずかしい事言ってるのよ！　ほら、元気ならさっさと用意して。朝食に遅れちゃうわ！」

真っ赤な顔で早口にそう言つと、アリスの部屋から逃げるように出て行ってしまう。

アリスはそんな後姿にしばらく笑いの発作が止まらなかった。

+ + +

その日の授業はいつも以上に平穏なものに感じた。

空を見上げれば優しい青。春先の穏やかな空気に、眠気すらも誘われそう。

平和だ、と思う。

この平穏はこれから先も続くのだと無意識に思っていた。でも本当はわかってる。

夢のような日々はいつか終わる。いつかこの学校を出て、今度は一人で生きてゆかなければならない。

来た当初はひどいホームシックにかかって、毎日泣き暮らしていたのに。

ふと昔を思い出して、アリスは一人苦笑する。

十年　　なんて長い時間。そして同時に、なんて短い時間。

兄がいなくなった時、アリスは世界に一人きりだった。でもこの十年で、アリスは兄の代わり以上のものを手に入れたと思う。

それは友達であったり、先生であったり、お気に入りの場所、あるいは今まで学んできた全てのこと。

(…あの手紙の事は、忘れよう)

アリスは静かに決意した。

単なる悪戯だと思うし、本気で取る方がきつと変だと思うけれど。でも、もし　　本当に兄からの物だとしたら。

(『不思議の国』なんて行けなくてもいい。わたしはここが好きなんだもの)

もしかしたら、あれは謎かけのように見せかけた兄からのメッセージではないかとアリスは思う。

つまり　『不思議の国』とは、現在兄がいる場所の事で、兄はもう一度自分と暮らさないかと言っているのではないかと。

…どちらにしても、卒業する時はそう遠くない。その時までここに居たいと思つてどうして悪い事がある？

住所がわからないから返事は出来ない。でもあの文面を信じるのなら、その内、兄の元へ自分を連れてゆく人物が現れるだろう。

あの時の『後見人』のように。

ならば、その時に言えばいい。自分はそちらには行かない、と。

この優しく穏やかな世界を捨てられない。それに一番初めに自分をこの場所に一人置き去りにしたのは兄の方なのだ。

(…もう、わたしは兄さんがいなくても生きてゆけるもの)

もう、兄だけを頼りに生きてきた頃とは違う。

アリスは教師の解説を聞き流しながら、窓の外を流れ行く雲を眺めた。

アリス（4）

その夜。

皆が寝静まる真夜中を待つて、アリスは兄からの手紙を二通とも燃やした。兄と決別する為の、儀式のような気持ちで。

燃やす前に数度読み直す。

もしかしたら…兄との関わりはこれで最後になってしまうかもしれない、と思いながら。

勝手にいなくなってしまうて、その事はアリスをとて傷つけたけれど。

でも…やっぱりどうしても憎めはしなかった。幼い頃のままではないけれど、それでも兄の存在はアリスの心の中にしっかりと根付いている。

きっと、どんなひどい目に遭わされても、自分は兄を心の底からは嫌いにはなれないだろう。そんな気さえた。

食堂からこっそりと持ってきた皿の上で、最初の手紙に火をつける。古かったそれは、あつという間に灰になった。

次に二通目。こちらは最初のものよりは時間が少しだけ長かったけれど、やっぱり同じように灰になる。

（…本当は、会えるものなら一度くらい、顔を見たかったけど）

いきなり消えたり、いきなり変な手紙を寄越したり。正直怒っているのか、それとも喜ぶべきなのかわからない。

でもアリスは覚えている。兄と共に暮らした、幼い時間。確かに自分は幸せだった事を。

十年前に何があつて、どうして自分を一人にしてしまったのか、尋ねてみたいと思った。でも同時に、その答えを聞くのも怖い。

相反する気持ちの中で揺れ動く自分の気持ちを落ち着かせようと、アリスは窓辺に行き、窓を開けた。

すつと、冷たい夜風が入って来る。同時に薫る、緑の匂い。思

わず目を細めたアリスは、何気なく空を見上げて一瞬目を見開いた。

満月。

脳裏に瞬間的に浮かんだ言葉を追い出すように頭を何度か振ると、月から目を反らし、代わりに夜の闇に沈んだ庭に目を向けた。

もう忘れるのだと心に決めたばかりだ。たかが月を見ただけで

暗示的な満月だからと言って 心を揺らしてどうする？

だが、そう思うアリスの心を見透かしたように、視線を向けた夜の庭にもまた、いつもとは違うものが存在した。

(… !?)

ぎよつと目を見開いたのは、それが確かに人影であるとわかったからだ。

深夜という事もあって、部屋の明かりはつけていない。その上、アリスとジュリアに与えられている部屋は二階にあり、庭からアリスの様子がわかるはずがない。

…そう思うのに。

反射的にカーテンの影に身を隠し、アリスはそろそろと庭にいる人影を観察した。

光源のない庭に立つ人影からは、当然ながら顔や表情が読めない。それでもその背格好から、男性である事と比較的長身である事だけは窺い知れた。

(何…一体、誰?)

心臓が早鐘のようだ。だが、それは恐怖からと言うよりも、むしろ単なる驚きからのものだった。

…夜の庭に立つ不審な人影。しかもここは女子寮で、明らかに怪しいとしか言いようがないと言っのに。

(何をしているの?)

怖いもの見たさで、そろそろとアリスは開いた窓から階下を見下ろす。

人影は動かない。彫像のようにそこに立ち尽くしたまま　　ま
るで、そこにいる事が目的であるかのように。

(…どうしよう)

しばらく眺めていたアリスは、やがて困惑と共にそんな感想を抱
いた。

春先とはいえまだ冷える。窓を開けたままで寝ると風邪をひきそ
うだし、何より窓の外に不審人物がいるのにあまりにも無用心な気
もする。

だが、今閉めれば確実に向こうにアリスが起きている事がわかる
だろう。

何しろ、アリスの部屋の窓は開ける時はそんなに音を立てないの
に、閉める時は何故か少し軋んだ音を立てるのだから。

(……)

しばらく考え込み、どうしたものかと考えたアリスは、やがて一
つの結論に辿り着いた。

(…そうよ。別に見つかってもいいじゃない。こちらが起きている
とわかったからって、ここは二階だし、入って来る訳じゃないわ。
逆に起きていると気付かせたら、向こうが逃げるかもしれない！)

よし、と覚悟を決めると、アリスは行動に出た。窓枠に手をかけ、
わざと音を立ててそれを下ろす。

裏庭にいる男が、物音に気付いて顔をこちらに向けた。

(……！)

地上と二階、しかも夜の闇の中だというのに、確かに目が合った。
その途端、アリスの心臓は今まで以上に活発に動き始める。

男は窓際から動く事の出来ないアリスをじっと見上げている。微
かに月光で浮かび上がる顔。その顔をアリスも目を反らす事が出来
ないままに見つめた。

(まさか)

…十年経っている。

自分の中の記憶も、随分色褪せ朧げになってしまっている。なの

に。

（…兄さん？）

月明かりの下、夜の庭から見上げる顔は、十年前に自分の前から姿を消した兄の面影があるような気がした。

気のせいかもしれない。けれど、直感的に感じたそれを否定するだけのものを、アリスは持ち合わせていなかった。

（迎えに、来たの？）

そんなはずはないと思いながらも、アリスはその可能性を考えずにはいらなかった。

思い出すのは先程燃やした、二通目の手紙。そこには何と書いてあっただろう。

『シロウサギが君を迎えに来る。』

彼について扉を開けてごらん、アリス』

本当にその言葉通りに誰かが来るとしても、兄以外だと思っていた。

…もちろん、庭にいる怪しげな人物が、その『迎え』であるかは確かではない。それはアリスにもわかつている。

こんな夜更けにやって来る必要性が何処にある？ アリスが寝ている可能性もあるだろうし、寝ていなくても夜中に窓の外を見るなんて事はそう滅多にある事ではない。

そう、思うのに。

（…駄目）

アリスは必死に言い聞かせた。

男はまだこちらを見上げている。まるで アリスに初めから用があつたかのように。

（気にしちや駄目よ、アリス。あの人が兄さんのはずがない、もし兄さんなら…堂々と昼間に姿を見せるはずだわ）

血の繋がった父兄なのだ、こそこそと人目を避けて会いに来るな

んておかしい。あれは違う。ただの不審人物だ。そうに決まっている。

「……ッ！」

精神力を総動員して、アリスは男から目を反らした。そしてカーテンを一気に閉めて男の姿を視界から追い出すと、そのまま脱力したかのようにへなへなと床に座り込む。

ひやり、と冷えた床の感触によりやく現実感が戻ってきた。

（……これで、いいのよ。わたしは、何も……誰も見なかった。見なかったのよ）

心の中で繰り返し　それでもなかなか動悸は治まらなかった。いかに自分が動揺したのか、自分の身体が何よりも雄弁に物語る。

アリスは知らず、苦笑を口元に浮かべていた。

（何だか、お化けか何かを見た後みたい）
でも心情的には近いものがあつた。

十年前にふいに姿を消した兄の存在は、一切の繋がりのなかった時間によって希薄になってしまっている。

表情や仕草、癖　そうしたものすら、明確な形ではアリスの中には残っていない。

だからこそ、庭に立つ男の顔にその面影を見つけて、必要以上に心が反応してしまったのだろう。心の奥底にあつた、再会する事への恐れが目覚めるのと共に。

……そう。アリスは兄との再会を無意識に恐れていた。もう一度会いたいという気持ちに嘘はないけれど。誰よりも大好きだったというのも本当だけど。

（……だって、怖いもの）
真実を知るのが、怖い。

兄が姿を消したその理由を知るのが、怖い。

兄がいなくなったのは、もしかしたら自分に嫌気が差したからかもしれないのだ。

アリスが七歳の時、兄は十七歳。

アリスの目には大人に映ったけれど、当時の兄と同じ年になった今ならわかる。兄もまた、心の支えを必要とする子供だったであろう事が。

自分ならきつと出来ないと思うのだ。自分の事すらもままならないのに、更に手のかかる幼い子供の世話を見るなんて。

だから…怖い。

兄の口から、そうだと言われる事が。自分が兄にとって、全てを放棄したい程に『お荷物』だったと知る事が。

アリス(5)

(…寝よう)

一体どれ位そうして床に座り込んでいたのか。
ようやく動悸が治まり、アリスの心にも落ち着きが戻ってきた。
ゆっくりと立ち上がり、カーテンに隠れた窓を見る。

…まだ、あの男はそこにいるのだろうか？

確認したい気持ちが一瞬浮かんで、慌ててアリスは首を振ってその考えを追い出した。それでは元の木阿弥だ。

そこからいなくなっているならいいが…もし、まだこちらを見ていたら。

(……)

想像するだけでも、また先程の恐れに似た感情が襲ってきて、きゅつと胸元を握る。

今日はこのまま、寝てしまおう。

そう心に決め、窓辺を離れる。そのまま窓を背後にしベッドに向かおうとして アリスの足は止まった。

「……!？」

一瞬、悲鳴が出掛かった。

というのも、部屋の中央の決して広いとは言えない空間に何かがあったのだ。淡く発光するそれは、ゆっくりと大きくなってゆく。

「な、何…なの……？」

再び復活した動悸に言葉が乱れる。ただし、今度は恐怖の為に。
逃げたくとも、出口は光の反対側しかない。結局アリスは身動きもままならないまま、その光の動向を見守る事になった。

やがて光はアリスが見つめる中、一抱えほどにまで大きくなった。
ほぼ球形だったそれは、次第に一つの形を取り 。

(…これは……!)

それが何の姿を取ろうとしているのか気付き、アリスの目が見開

かれる。もうそこから恐れや怯えは消えていた。

目の前の光は、淡い月光のような光をそのままに、アリスの知る生き物の姿を象っていた。特徴的な長い二つの耳が、ぴくりと動く。「銀色の…うさぎ……？」

呆然と呟くと、まるでそれを待っていたかのようにそのうさぎが動いた。ぴよこり、ぴよこり、と特徴的な歩き方で見守るアリスの目前にまでやって来る。

丸い、やはり銀色の瞳がじつとアリスの顔を見上げた。吸い込まれるような、邪気のない瞳。

気がつくと屈みこみ、誘われるようにその銀色のうさぎに向かつて手を伸ばしていた。現実のものか、確かめずにはいられなかったのだ。

あと僅かでその仄かに光る毛皮に触れると思った、その瞬間。

「あ…っ」

アリスの心を見透かしたかのようなタイミングで、すいっとうさがアリスの手から逃げる。そしてそのまま反対側の扉の方へと移動してしまった。

扉の前で一度足を止めて、アリスの方を振り返る　　まるで、付いて来いと言つかのように。

「……」

じつと見つめてくる銀色の瞳を、アリスは呆然と見返した。

そんなアリスをしばらく見ていたうさぎは、ふいっとまた扉の方に頭を向けたかと思うと、そのまま扉の方へ駆け出す。

「！」

進む方向には、ジュリアとの共同部屋に通じる扉。けれど今はそこは当然ながら閉じられている。

ぶつかる　　！

そんな風に思ったのに、アリスの予想に反してうさぎはぶつかる事なく扉の向こう側へ消えていた。…すり抜けたのだ。

「ま、待って……！」

一瞬見送ってしまったアリスは、反射的に扉に飛びついていった。もどかしい思いで扉を開くと、すでにそこにうさぎの姿はない。しばらく考えたアリスは、一度部屋に戻るとベッドの上に置いていたシヨールを羽織ってから、今度は廊下へ続く扉に向かった。もうとつくに皆寝静まっているのだろう、物音一つ聞こえてこない。

同じくもう寝ていると思われるジュリアを起こさないように気をつけて、そつと扉を開き頭だけを廊下に出す。

右を見る　　いない。

次に左を見る　　やはりそれらしきものの姿は見えない。

(…夢でも見たの?)

ひやりと流れ込んだ夜の空気に身震いする。春先とは言え、まだ夜は冷え込む。羽織ったシヨールをかき寄せ、しばしアリスは考えこんだ。

あの銀色のうさぎは、幻覚だったのだろうか？

けれど同時に違う、と否定する自分がいる。あれは絶対に見間違いではないと。

すぐ目の前にいたあの姿、あの瞳。…あんなリアルな見間違いがあるはずがない。滑らかな毛並みすらもはつきりと見て取れたのに。やがてアリスは決意すると、廊下を進み始めた。進む方角は左。

その先には階段がある。　　階下へと続く階段が。

(きつと…あそこにいるんだわ)

歩きながら思う。

あそこ　　裏庭。先程、窓から見ていたあの場所だ。

何故ならあの場所は、春が深まると白い花が一面に咲くのだ。

クローバーの白い花が。

その事を思い出して、知らず顔を顰める。まるで何もかもが仕組まれているような気がした。そうとしか思えない程に、符牒が揃いすぎている。

けれど、アリスは引き返さなかった。ここで引き返したら、何か

に負けてしまうような気がして。

+ + +

裏庭へと出る扉を開く時、流石に少し躊躇ちゅうちうした。

何しろ、そこにはおそらく先程のうさぎだけでなく、あの不審な男がいるに違いないのだ。

けれどアリスは自分を叱咤しったした。ほんの先刻、自分は決めたはずだ、と。

（わたしは 『不思議の国』 には行かない）

彼が兄であろうと、その使いであろうと…その事を伝えなければ。自分はこの場所を離れるつもりはないのだと。

心は決まっている。

アリスは一度深呼吸をすると、一息に扉を開けた。

「 こんばんは、アリス」

外へ出てきたアリスにそんな声をかけたのは、予想通り先程窓の外で見た男だった。

その腕に先程の銀色に光るうさぎを抱え、こちらを見るその人物は、二階から見下ろしていた時には気付かなかったが、かなり長身だ。

そして、やはりその顔は兄の面影がある。

ただ、兄と違う点があるとしたら、その髪の色が違う事と、かつての兄にはなかった何処となくシニカルな微笑を浮かべている事だろうか。

「 …兄さんなの? 」

尋ねた声は、緊張のせいで微かに震えてしまう。

そんなアリスを見つめ、男はおどけたように軽く両肩を竦めた。

「 残念ながら違うよ、アリス。私の名はシロウサギ。君を迎えに来たんだ」

「 …『不思議の国』に? 」

「そう、『不思議の国』に。少し時間がかかってしまったけれどね」
約束しただろう？ と、シロウサギと名乗った男は言った。薄く
笑った顔は、やはり何処か兄に似ている気がする。

…確かに、兄とそんな約束を交わした。

まだ、幼い子供の頃。世界が自分と兄だけで成り立っていた頃に
。

けれど。

その顔を真つ直ぐに見つめ、アリスは僅かに躊躇ためらった後、扉を開
くまで考えていた自分の考えを口にした。

「わたしは、行かないわ」

口にすると、ふと心が軽くなった。

思った以上に自分が緊張していた事に気付かされる。半ば開き直
った気分で、アリスはさらに続けた。

「…わたしは、ここが好きなの。『不思議の国』より、大事な場所
なの。ここを失ってまで行きたい場所はない。だから」

「だから…私とは行けない、と？」

「そうよ」

もしかしたら怒るだろうか そんな風に思ったのに、シロウ
サギは怒りはしなかった。

「…まあ、十年も待たされたらそうも思いたくなるか」

代わりにくすつと笑い、腕に抱いていた銀色のうさぎを地面に下
ろす。そして再び顔を上げた時 その表情は一変していた。

「でも…真実を知りたくはないか？」

「……！」

思わず息を飲む。それ程に彼の表情は真剣そのものだった。

「真実……？」

「『扉』を開いて、その向こう側へ行けば…全てがわかる。こんな
場所に十年も一人でいなければならなかったその理由も…君の『兄』
が消えてしまった訳も」

「そんなの…知りたくない」

…それは嘘だ。

けれど、ここで同意してしまったら駄目だと思った。せつかくの決意が鈍ってしまう。

しかしシロウサギはアリスのそんな心の動きを見透かしたように、また口元に笑みを浮かべるときっぱりと言い放った。

「嘘つきだな、アリス」

「！」

「知りたくない…もはや、兄などどうでもいいと思っているなら、そもそも私がこんな風に迎えに来れる訳がないんだよ」

「……？ どういう、意味……？」

「つまり、こういう事さ」

シロウサギはその白い手袋に包まれた両手を持ち上げると、そこに視線を落とした。

そして何処か面白がるような口調で、アリスが思いもしなかった事を口にしたのだった。

「何故ならこの姿はね、アリス。君が作り出したものなのさ」

アリス（6）

「…わたしが……？ どういう事？」

シロウサギの言葉はあまりにも想像を超えていて、アリスはまるで壊れたロボットののように、ぎこちなく同じような言葉を繰り返す事しか出来なかった。

「わたしが作り出したって…一体、何故そんな事」

動揺を隠さないアリスを、シロウサギは余裕の笑みで見つめている。まるで反応を楽しんでいるように見えて不快な気持ちになったけれど、それでも答えを待つしかない。

やがて彼は再び口を開いたものの、そこから飛び出したのは、アリスが期待した答えそのものではなかった。

「…二通目の手紙を、受け取っただろう？」

「え、ええ」

いきなり何を言い出すのだろう。そう思いながらも、つい先程燃やした手紙の事を思い出す。

最後に幾度も読み返したから、その文面はまだはつきりと覚えていた。

「そこに書いてあった事は覚えているかな？」

まるでアリスの心の中を見透かしたようにシロウサギは尋ねる。否定するのばからしくて頷くと、彼の笑みは深まった。

「シロウサギ あなたについて扉を開ける、って書いてあったわ」

「その前にまだあっただろう？」

「…ええ。お茶会の準備が整ったって事と、それから……」

答えながら、アリスはそう言えば一つ、わからないままだった事を思い出した。

「…クロウサギに渡された鍵を持っているか、って。でも…わたしはそんなもの持っていないわ。クロウサギがあの後見人だとしても、

あの時、わたしは何も受け取らなかったもの。ここには…それこそ身一つで来たようなものよ？」

「何を言っているんだい、アリス。そのクロウサギの『鍵』を、君はちゃんと持っているじゃないか」

「…え？」

予想外の言葉に目を丸くする。シロウサギは面白そうな顔で腕組みすると、視線を空に向けた。

その先にあるのは　　今や天頂を通り過ぎて、東へと傾き始めた満月。

「…『鍵』が、本当に鍵そのものの形をしていると思っていたのかい？」

「鍵そのものじゃないって…事なの？」

「その通り。クロウサギは君にちゃんと『鍵』を渡しているよ。そして君はそれをちゃんと今まで持っていた。だから…一通目の手紙は無事に君の元へと届き、そして私が君を迎えに来る事が出来たという訳だ」

それで種明かしは済んだとばかりに、シロウサギはアリスを流し見る。けれどアリスはまだ理解出来ずにいた。

『鍵』の形をしていない鍵　　けれど他に、彼に渡された物は本当に何もないのだ。

いきなりやって来て、アリス一人を車に乗せて、そして　　。
「…まさか」

ふと閃いた。同時に先程までシロウサギが見上げていた満月を見る。

あの時、確かに後見人からは何も受け取っていない　　形のあの『物』は。でも、別の何かは確かに受け取った。その事を思い出したのだ。

「　『満月。クローバーの庭。銀のうさぎ』」

それはまさに、今アリスの目の前に広がる光景。
空から光を投げかける満月と、春になったら一面に白い花を咲か

せるクローバーの庭。そこを今は自由に飛び跳ねている…銀色のうさぎ。

それは単なる符牒なのだと思っていた。あり得ない事が起こる為の。けれど、実際にはその言葉自体が『鍵』だったとしたら？

「…一種の、キーワードだったというの？」

確認を取ると、シロウサギは片眉を器用に持ち上げる事で返事に変えた。

肯定なのか否定なのかよくわからないが、おそらくそれが正解なのだろう。だが、そうであるなら同時に疑問も浮かぶ。

「その言葉を覚えていてるって、どうしてわかったの？ それと二通目の手紙がどう関係するの。あの後見人は、わたしがここにいて知ってるはずでしょう？」

先程のシロウサギの言い様では、まるでその言葉を忘れていたら兄からの手紙すらも届かなかったかのようだった。

それとも 兄はあの後見人を名乗った男とは、連絡を取り合ったりしなかったのだろうか。

そんな疑問に囚われて、最初の疑念を忘れていたアリスに、シロウサギは不意打ちのように言い放った。

「最初に言っただろう。この世界自体が、アリス…君が作り出したものだ。つまり…このクイーンズフィールドという場所は架空の場所なんだ」

「…嘘……」

「嘘じゃないさ。架空の場所である以上、そこに手紙を出したくても出せる訳がない。現実には何処にも存在しない場所なんだから。けれど、その内アリス宛に手紙を出す必要があるとわかっていた」

「何でそんな事がわかるの！」

半ば悲鳴のようなアリスの反論に、シロウサギは何処か同情的な目をしてみせた。けれど否定はしてくれず、そのまま言葉を重ねる。

「アリスのまったく理解出来ない 理解したくない、言葉を…だから『鍵』を渡したんだ。『不思議の国』とこの架空の世界

の接点となる場を作る為に。この世界では創造主であるアリス、君が当然ながら主導権を握っている。『不思議の国』の方から……たとえば手紙を出すとしても、アリスに受け取る意志がなければ届かない」

そして同時に、アリスが『不思議の国』が実在すると信じている事も必須条件だった、と彼は続けた。

その為に『鍵』は明確な物をイメージさせるものではなく、何処か呪文めいた、それだけでは意味を成さないような単語の組み合わせにしたのだ、とも。

……年端も行かない子供だからこそ、その意味を繰り返し考える事で、その言葉を心に刻むだろうと考えて。

そして時が満ちた時、そのイメージからこの世界と『不思議の国』の接点を作り出す。関連性のない言葉からアリスの心は、見事に一つの空間を造り出した。

「当時はこんなにも待たせるつもりがなかったから、そこまで深刻には考えてなかったんだがね。ところが事態が変わって、予定よりも大幅に迎えを超越す時期が遅くなってしまった。……正直、アリスが『鍵』の事を覚えているのか自信はなかったよ。けれど、こうして私は迎えに来れた。それはアリス、君が心の底で『不思議の国』が実在する事を信じていたからだ」

「……」

もはや、アリスに反論の言葉もない。いくら作り話でも、ここまですべて理解に苦しむ話はないだろう。

生まれて十七年生きてきたこの世界が作りもの　それも自分が造り出したものだなんて、どうして信じられる？

いくらなんでも、知らないものを無から生み出せる程の想像力は持ち合わせていない。確かに同じ年の女の子よりは、少し精神的に幼いかもしれないと心密かに思ったりはしたけれど。

「……兄さんは……」

混乱の中、やがてアリスの口から言葉が零れ落ちた。

「アリス？」

「じゃあ、『兄さん』も…本当は作り物だったって、言うの……？」
幼い頃の抛り所だった存在。優しく、賢い。たった一人の
自慢の兄。

…それすらも、彼は想像の産物だと言うのだろうか。

「信じられないわ。だって、覚えているのよ。一緒に遊んだわ、寝る前にお話を読んでくれたわ。庭で遊んで転んだ時は、慰めてくれた。…それすらも、わたしが造り出したって言うの！？」

言いながら感情が高ぶるのを感じる。こんなに腹を立てた事は、きつと生まれて初めてだ。

「何処にその証拠があるの！？ あなたに何の権利があって、そんな勝手な事を言うの！？」

…全ての思い出を否定された事が、自分でも驚く程悔しかった。

「…見せてみなさいよ、本当に『不思議の国』があると言うなら…そこに連れて行ってみせなさいよ！…この世界が嘘だという、その証拠を見せて。でなければ、そんな事信じられない……！！」

感情の赴くままに叩きつけた言葉に、シロウサギは少し呆氣に取られた顔を見せた。

もうその顔に、兄の面影は見つからない。何故、最初に似ていると思ったのかすらわからない。

それは面識のない、見知らぬ男の顔だった。

シロウサギは顔を真っ赤にして、今にも泣き出しそうな…それでも怒りを隠さないアリスをまじまじと見つめ。やはりアリスの予想を超える行動を取った。

「！？」

「…なら、そうする事にしよう」

あ、と思った時には彼の手が魔法のようにアリスの手首を掴んでいる。

いつの間にか足元にいた銀色のうさぎに目を向けると、アリスに聞こえない小声で何かを呟いた。

「な、何を…！？」

「では、お連れしましょう…アリス。ご希望通り、『不思議の国』へ」

至近距離でそんな事を囁かれたと思った瞬間。

足元のうさぎからまばゆい光が放たれ、世界は瞬く間に真っ白に染まっていった。

月も、クローバーの庭も。

背後にあるはずの宿舎も、春先の肌寒い夜の景色が遠ざかる。

ただ、手首を掴むシロウサギの手の温もりと感触だけは随分とリアルで。

「…ちゃんと、ついておいで」

それが認識出来た最後の言葉。

ふと気付くとアリスは意識を手放していた。

アリス(7)

…変な夢を見た。

今まで現実だと思っていたものこそが、全部『夢』だったという悪夢。

けれどその夢から覚めたと思ったら、また別の夢の中だった。

何処もかしこも真つ白な世界を、一人で彷徨^{さまよ}う、そんな夢。上も下もない場所で、時折誰かの声や何かよくわからない音が聞こえてくる以外は、無音の空間。

夢の中で夢を見るなんて、話には聞いた事があつたけれど、よもや自分が体験するとは思わなかった。

…多分、夢だとわかつているから落ち着いていられたのだろう。もし現実こんな何もない場所に一人でいたら、きっとその内、気が狂ってしまうと思う。

しばらくその場に立ち尽くしていたものの、何の変化も訪れなかったので、取り合えず前に向かって歩き出す。

方向がわからないので、どの方角へ進んでも構わない気もしたけれど、わざわざ背後に向かって歩く気も、それ以外の方向に向かう気も起こらなかった。立ち止まるのも面倒で、惰性のように歩く。

どんなに歩いても周囲の情景は変わりなかったが、やがて聞こえてくる声や音は時が過ぎるにつれ、不明瞭だったものがはっきりと聞こえるようになってきた。

言っている事や、聞こえてくる音(何かの機械音のようだ)の正体は依然としてわからないのだが、それはアリスの不安をいくらか和らげる作用を持っていた。

その内、周囲にも少しずつ色が混じり出し、声と音は更にクリアなものへと変わっていく。すると自然に足取りも軽くなった。

(…変な夢)

恐怖はないし、気持ちは落ち着いているけれど、変化はあまりに

もゆっくりで流石のアリスも退屈になってきた。

現実と違い、いくら歩いても疲れる事はないが、その分限界がない。このままひたすら歩き続ける事を考えると、流石に嫌気が差してきた。

（いい加減に、目が覚めないかしら）

そう思うがそれで目が覚めれば世話はない。諦めてまた足を踏み出した、その時。

『先…生！ …のパターンに……が！』

聞こえてくる声に変化が現れた。先程までとは違う、何処か緊迫した雰囲気。何事だろうかと思っていると、不意に手に温もりが生じた。

（…？）

ふと視線を向けたそこに、特別変化はない。
けれどやはり感じる。まるで誰かが触れているような。

「… シロウサギ？」

呟いたその言葉は、無意識のものだった。しかしその瞬間、周囲は劇的に変化した。

まず目に入ったのは、白い天井。

薄暗い視界に、それがぼんやりと浮かび上がって見える。

周囲からは複数の人の気配がした。慌しく立ち動あわただいているのが伝わって来る。

幾度か瞬きをして、それからようやくすぐ側に誰かがいる事に気付いた。思うように動かない首を動かして目をそちらに向けると、自分を見下ろす目と合った。

薄暗い上に逆光でよく顔がわからない。けれども、『悪夢』の中で出会ったシロウサギではない事だけは確かだった。

シロウサギはその名の示すような白い髪をしていたけれど、見下ろしているその人物の髪は暗い色をしていたからだ。

「……？」

誰、と尋ねようとして、口から零れたのは掠れた吐息^{かす}だけだった。思い通りに動かない身体に困惑するアリスに、見下ろしていたその人は静かな、けれども優しい声でこう言った。

「…お帰り、アリス」

確かにそう聞こえた。

夢から覚めたただけなのに、何故そんな事を言われるのだろうと思ったものの、不思議とその言葉から受け取ったのは今までに感じた事のない安堵感だった。

ふと、また睡魔に襲われる。再び閉じようとする目蓋を必死に開けていようと努力するけれど、それも無駄だった。

そのままアリスはまた意識を手放していた…今度は、夢も見ずに。

+ + +

目を開くと。

すぐそこに、かつて自分の前に『後見人』として現れた紳士

近くで見ると、あの時より幾らか年を経ていたけれど が、

心配そうな顔でアリスを見下ろしていた。

その背後には真っ白な天井と壁。少し肌寒い室内は、アリスと彼以外にいないようだった。

「目が覚めたかい、アリス？」

穏やかな声にアリスは反射的に頷き そしてようやく周囲と

自分の状態に意識が向いた。

重い四肢。上体を起こそうとして叶わず、仕方なく首だけを巡らせて周りを見た。

「…ここは？」

唇から漏れた疑問の声は、やはり驚く程掠れていた。

「ここは医療施設の一種だよ。…君はずっと、夢の世界にいたんだ」
「夢……？」

『後見人』の説明に首を傾げる。

まだ頭の中が朦朧^{もうちやう}としていて、そんな事を言われても何処から何処までが夢だったのかわからない。

あの白い空間を漂っていた辺りから？

それとも、夜のクローバーの庭でシロウサギに会った辺りから？

あるいは 考えたくはないけれど、アリスが今まで現実と受け止めていた全ての時間が？

…困惑と混乱に支配され、もはや返す言葉も紡げないアリスに、彼は労わるような声音で言った。

「
… ようこそ、アリス。現実という名の不思議の国へ」

+ + +

それから、本当に『不思議の国』に迷い込んだような怒涛の日々だった。

今まで生きてきた世界とはまったく異なる、ハイサイエンス・ハイテクノロジーが溢れる世界。そこはあまりにもアリスの許容範囲を超えていて、かえって混乱は少なかった。

最初から『そういうもの』だと思つようにして、何がどうなったらそうなるのかは考えない。

…それでもしなければ、きっとアリスは数日で元の夢の世界へ帰っていた事だろう。

長い期間動かす事のなかった為、歩く事もままならない身体のリハビリを言われるままにこなしながら、アリスは少しずつ『本当の自分』の事を知って行つた。

物心つくかつかないかの頃に起こった大規模な事故で、家族を全てを失ってしまったこと。

その事故の数少ない生存者だったものの、その時のショックの為

か、奇跡的に身体的な外傷がほとんどなかったにも関わらず、意識が戻らないままだったこと。

身寄りもなく、かといって放置も出来ず 扱いに困っていた所に持ち上がった一つの実験計画。その被検体になる事でその後の保障が得られたこと。

その際に後見人となったのが例の紳士 宇佐木玖郎氏。クロウウサギで『クロウサギ』なのだと、後で教えられた。

実験内容は植物状態にある人間に特殊な『夢』を見せる事で覚醒へと導くというもので、その『夢』がいかなるものだったかは、直接体験したアリスに説明は不要だった。

実に、十五年がかりの計画。

それだけその実験は困難を極めたという事なのだろう。

その中でも問題になったのが、十五年もの年月で成長してゆく身体に対し、時が止まったままの精神をどうやって身体と同様に成長させて行くか、だった。

目覚めた時、十七歳の身体に二歳の子供の精神では、確実に混乱が予想される。

そこで取られた苦肉の策があつた、クイーンズフィールドだった。

『夢』と暗示 その両方を駆使して、精神も身体に合わせて成長させる。その具体的なイメージが『学校』となり、『寮』となり、『教師』となった。

…アリスが七歳の時から過ごしたあの学び舎も、ルームメイトのジュリアも、他のクラスメイトや教えを受けた先生たちまでもが、本当に全て現実のものではなかったのだ。

この事実にはアリスも相当のショックを受け、打ちのめされた。あれ程に愛し、心を寄せた数々が夢 外部からの情報を元に自分の想像力が作り出した存在だったなど、信じられなかった。信じられなかった。現実を前にしても。

…けれど。

そんな哀しみに浸る暇はアリスにはなかった。

というのも　アリスが補助を必要としながらも歩けるようになり、事実を概要的ながらも理解し始めた頃、実験の成功を聞きつけて、世界中のマスコミが彼女の元へ詰め掛けたのだから。

アリス（８）

「お疲れさま、アリス」

すっかり顔馴染みになった女性スタッフ　　いつだったか夢（『夢』の中で夢を見たというのも妙な話だが）に出てきた中性的な容姿の人物　　がソファにぐったりと身体を沈めていた彼女に^{おき}労いの言葉をかけた。

顔を上げると、差し出されるティーカップ。

落ち着くわよと手渡されたハーブティーに、アリスはようやくきこえないながらも微笑を浮かべる。

「…ありがとう、ミス・セシル」

「どういたしまして」

ミス・セシルはアリスが目覚めた後から、ずっと付きつきりで世話を焼いてくれている。

看護の資格を持ち、同時にカウンセラーでもある彼女の存在は、アリスには大いに救いになった。今では年の離れた姉のような感覚すら抱いている。

「なかなか落ち着かないわね……。最近平和だから報道のネタがないんでしょうけど」

困ったように呟き、ため息をつく。

そしてミス・セシルはすっかりお決まりになった言葉を口にした。「ったく、こんな時こそ自分が矢面に立つべきだろうに…あの男は……っ」

苛立った口調で言われた言葉に、アリスは苦笑するしかない。

『あの男』とは、アリスを目覚めさせる計画を立てた人物にして、命の恩人（になるのだろう）である人物の事だ。

ミス・セシルは彼の助手をしているらしいが、肝心のその人物は今ここにいない。

「あの…でも、遊んでいる訳じゃないんでしょう？」

仕方なくアリスが彼を庇^{かば}うように口を開くと、ミス・セシルは『
…そうなんだけど』と苦虫を噛み潰したような顔で同意する。

十五年にも渡る『夢』から生還を果たしたアリスにマスコミが殺
到したように、その計画を立てて実行し、しかも成功させた彼もま
た多忙な日々を送っているらしい。

…そう、『らしい』、だ。

どれも人からの伝聞で、実際の所どんな風に多忙なのかまではア
リスにはわからない。

学会や講演会、共同研究だとかで世界中を飛び回っている、と言
われてもピンと来ないし、それ以前に。

「…まだ、帰ってこないんですか？」

「え、先生？ …まあね。今、地球の反対側にいるし…でもその内、
必ず戻ってくるから」

「そうですか……」

ティーカップを傾けながら、アリスは内心ため息をつく。

（一体、いつになったらちゃんと会ってお礼が言えるんだろう……
？）

『こちら側』へ戻ってきた時、ほんの僅かに言葉を交わした人物。
あの人が多分、ミス・セシルの言う『先生』なのだと思うのだけれ
ど。

…けれど、次に目を覚ました時にはもう、彼はこの施設からいな
くなっていた。

あの時は顔がよくわからなかったので、後でミス・セシルに写真
を見せてもらったら、髪と瞳は柔らかな黒だったものの、『夢』の
中で会った『シロウサギ』に瓜二つの顔だった。

薄情者なのよ、とはミス・セシルの弁。あいつはちょっと協調性
というものがなくて…、とはクロウサギ 宇佐木氏の弁。

他にもここにいるスタッフから、同様の言葉をたくさん聞いてい
たけれど、どうしても納得出来ない。

だって、彼はあの時言ってくれた。

お帰り、アリス。

幻想の『兄』のイメージそのままに、優しい声で。

「そんなに会いたい？ 会わない方がいいと思うわよ？ もしかして『いい人』だか思っているのかもしれないけど、本当に嫌な奴なんだから」

「でも、助けてもらったのにお礼の一つも言わないなんて……。

それにそんなに悪い人って感じじゃなかったですよ？」

「騙されてる！ 絶対、騙されてるよ！ 実の父親の玖郎さんも言ってたでしょ？」

「逆にそこまで言われてしまうと、かえって会ってみたいと思ってしまう。」

親切なミス・セシルや、穏やかな人格者の宇佐木氏ですらそこまです言う彼。……一体、実際にはどんな人なのだろう。

『夢』の中のシロウサギは確かに少し意地悪な気もしたし、アリスも終いには怒りをぶつけもしたけれど。

（……本当は優しい人だと思うんだけどなあ……）

どちらにしても完全なりハビリが終わっていない今、自分はここから動けないし、他に行く場所もない。

……焦る必要はないだろう。もう『夢』のように、目覚めたら全てが幻になる訳ではないのだから。ここで待っていれば、今度はちゃんと会えるはず。

現実の、彼に。

+ + +

「……なあ、史朗。まだ戻らんのか？」

アリスとミス・セシルが話している頃、宇佐木玖郎氏もまた、画面に向かって話しかけていた。

通話相手は彼の一人息子にして、何の因果かとんでもない知能を抱えて生まれてきた天才学者だ。名前を宇佐木史朗、という。

『何か問題でも起こったのか？』

画面の向こうの青年は、玖郎に目も向けずに手元の書類を眺めつつ、言葉だけを返してくる。

仮にも父親に対して礼儀知らずも甚だしい態度だが、それはいつもの事だったので玖郎は特に気にも留めなかった。

『そうやっていても、ちゃんと相手の話は聞いているし、理解もしているとわかってるから。』

『問題はない。だが…アリスが可哀想だろう。目が覚めてみたら、恩人であるお前はとっとと国外に行ってしまうているわ、訳もわからないのにマスコミに囲まれるわ……』

『仕方ないだろう。こっちの仕事が途中だったんだ』

答えて、ようやく目をこちらに向ける。口元に浮かぶのは、冷め切った微笑。

『目を覚まさせた事でそっちの仕事は終わった。後は本人が努力する問題だろう？』

『しかしだな、』

『第一、会ってどうするんだ。世間話か？…くだらない』

『史朗！…助けるだけ助けて放り出す気なのか！？』

流石にその言い草はあんまりというものだった。思わず眉を吊り上げた玖郎に、史朗は鬱陶しそうにため息をついた。

『…そちらの手は足りているだろう？リハビリに関しても、その後の社会復帰に関しても、十分なスタッフがいるはずだ。なのに何故、俺がいる必要があるんだ』

『そういう問題じゃないだろう！』

『ともかく。あと短く見積もっても一ヶ月は戻れない。これは譲れないからな。それでも時間はいくらあっても足りないんだ』

「…つたく、お前という奴は……。何でそんなに忙しくする必要があるんだ？」

呆れたように漏らす父親に、史朗はおや、と言わんばかりに片眉を持ち上げる。そしてばかにした口調で言い切った。

『決まってる。俺が天才だからだ』

+ + +

現実という『不思議の国』は、毎日アリスに発見と驚きを齎す。もたら
目覚めてから一ヶ月。それはまだ途切れる事はない。

アリスが彼と再会し、現実の『シロウサギ』のとてもない口と性格の悪さを知るのは、それから更に一月後のこと。

アリス（8）（後書き）

こちらでもHPでキリ番リクエストをしていた際に書いた作品です。
お題は『銀の兎』。

『銀の兎』はその方の運営するサイト名でもあったので、この言葉をどう使おうか少し悩みました。

で、結局「銀の兎」「銀色の兎」「月夜の兎」「うさぎを追いかける」「アリス」という原型を留めてないほどに連想を重ねてこの話が出来ました。

以前から、一度は「アリス」ネタも書いておきたいなーと思っていたのもありますが。

結果として、この話は非常に私らしい展開（ファンタジーと見せかけて実はSFなのか？的展開）の話になり、正確なジャンルが不明という困ったものになってしまいました……。

後日、献上先の方から「ロマンティックSFでいいと思います」とお言葉を貰って、無事に（？）ジャンル決定となった経緯が。

読んだ方にはわかりませんが、原作の『アリス』をイメージする部分は極力避けてあります。

二次創作的なものにはしなくなかったので、主人公の名前と、目を開けるとお姉さんが…というくだりがお兄さん（？）にという位でしようか（笑）

万人受けする作品ではないかと思いますが、読んだ方が少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2302m/>

アリス

2010年10月8日14時25分発行